



スリランカに行くのは初めてである。発展途上国を研究の対象としているにもかかわらず、今までに仕事で訪れたことのあるアジア諸国は、インド、ネパール、中国の3カ国でしかない。新しい国で新しい人に会うことはいつも心躍るものだ。

私はアジア生産性機構（Asian Productivity Organization, APO）の調査研究プロジェクト「地域社会再構築のための調査」にかかわっている。APOは日本を含むアジアの20カ国・地域が加盟する国際機関であり、農業だけでなく、工業やサービス産業まですべての産業分野における生産性向上に取り組んでいる。その重点分野の一つに「地域社会総合開発」がある。これは、日本でいえば「村おこし」のような活動で、就業機会の拡大による農村の貧困削減を目標とする。

加盟国のうち10カ国が参加して昨年度から始まったこの調査研究プロジェクトでは、ソーシャルキャピタル（社会関係資本）に着目し、その附存量と村落開発のパフォーマンスの関係を解明することを課題とした。ソーシャルキャピタルは共同体を単位とした活動に影響を与えることが知られており、近年注目を集めている。調査は、それぞれの国で各国の研究者が現在実施中である。

現地調査のため、本年8月末にスリランカを訪問した。同国では、一村一品プログラムを実施している村落の中から30の村を選び調査対象としている。内訳は、稲作を主とする村10カ村、伝統工芸を主とする村10カ村、商品作物生産を主とする村10カ村である。

一村一品運動は、わが国の大分県を発祥と

する村おこし運動であることはよく知られている。現在では、アジア諸国にまで拡大し、様々な国で取り組まれている。

調査対象村を訪ねる。稲作を主とする10カ村の一つだという。まず、この村の「一品」はコメだということに驚いた。確かに、この村にとって稲作はもっとも重要な経済活動である。しかし、コメはスリランカの主食であり、国中の至るところで作られている。この村の作るコメが他とは違う特長を持っているわけでもない。聞くと、稲作を主とする村の一品は、すべてコメであることがわかった。それで、プログラムからの補助金は、灌漑用ため池の補修に使われていた。

次の村は、素焼きの壺作りを伝統工芸とする村である。この村の一品はいうまでもなく、この日用品向けの素焼き壺である。壺作りの村をいくつか見て回ったが、予想通り、作られている壺に大差はなかった。ただし、こちらはプログラムの補助金で、焼きがまの近代化や製品の改良への取り組みが始まっており、製品の差別化も試みるかも知れない。

この調査研究プロジェクトでは、ソーシャルキャピタルが、こうした村おこし活動の成功する確率を高めていることを実証したいと考えている。しかし、たとえ活動に成功しても、そこで作られる「一品」が従来と同じならば、所得向上の効果は限定的なものにとどまってしまう。これは、発展途上国の農村で企業家精神はいかにして生まれるのかという私の常々の疑問につながる課題である。



伝統的な素焼きの壺作り